

池波正太郎

雲霧仁左衛門

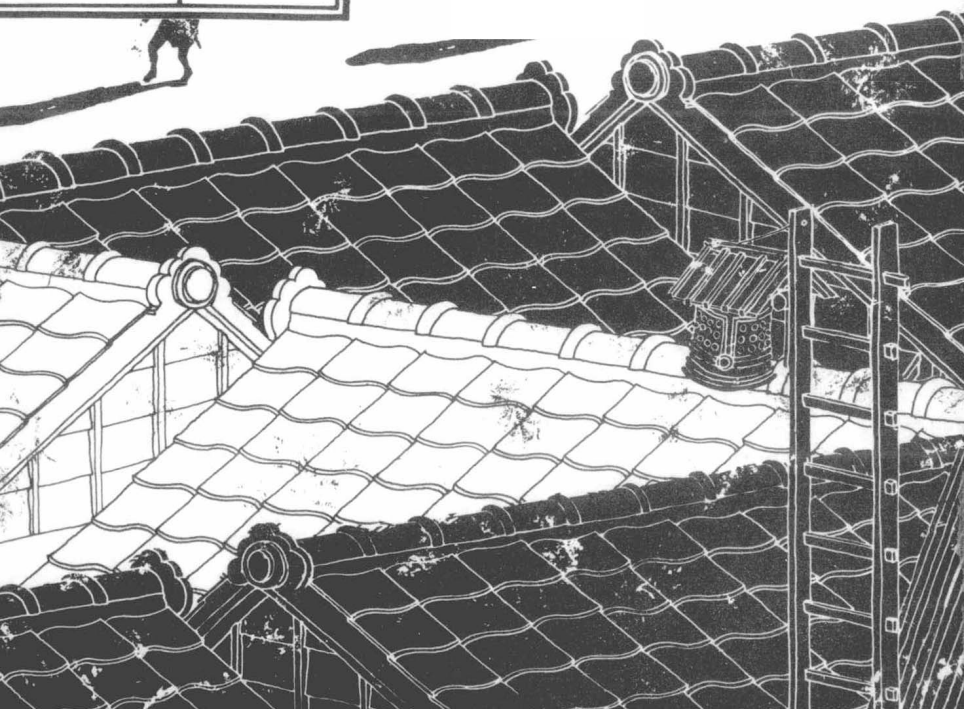
後編



# 霧仁左衛門

## 波正太郎

### 後編





雲霧仁左衛門（後編）  
くもぎりにざえもん

昭和四十九年十二月十五日 発行  
昭和五十三年八月五日 十一刷

定価 八五〇円

著者

池波正太郎  
いけなみしょうたろう

発行者

佐藤亮一

発行所

株式会社 新潮社

郵便番号 一六二  
東京都新宿区矢来町七一  
電話 編集部（三）二六二五  
振替 東京四一八〇八番

印刷所 株式会社 金羊社  
製本所 新宿加藤製本

© Shotaro Ikenami 1974 Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付  
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

雲霧仁左衛門

（後編）



## その後

尾張・名古屋城下の豪商〔松屋吉兵衛〕方で、金五千兩余を盗み、近所の鍵屋又兵衛方から出火した〔火事騒ぎ〕にまぎれ、雲霧仁左衛門と、その一味は一名の損傷もなく逃亡した。

そして、この年も暮れ、享保八年（一七三三年）の年が明けた。

この年の夏、松屋吉兵衛方は焼失前にも増して立派に再建された。

松屋吉兵衛は、当夜の雲霧一味のことを、

「あれだけの人数で押し込んで来ながら、たかだか五千兩の獲物で引き下って行つたわい。ものものしい割合には、間ぬけな泥棒どもじゃ」

などと、せせら笑っていた。

しかし、金蔵の中へ閉じこめられたまま、火事騒ぎになつたときには、

「他人にはいえぬが、いやはや、生きた心地もしなかつた

……」

吉兵衛は、息子の吉太郎のみへ、そつともらしたそうな、ともあれ、松屋吉兵衛方には、雲霧仁左衛門や、木鼠の吉五郎が、

（かならず、別の金蔵が在る）

と、にらんだとおり、五千兩をはるかに越えた莫大な金をしまひこんだ金蔵が、屋内のどこかに在ったにちがいない。

そして、松屋再建のための木材は、尾張家の御領林から伐り出されたものが使用され、この木材の代金は、すべて無料であつたとか……。

松屋吉兵衛の財力が、いかに尾張家に喰ひこんでいたかが、この一事をもつても知れようというものだ。

だが、吉兵衛の激怒は、容易におさまらなかつた。それは、七化けお千代のことである。

「ようも、ようも……」

と、吉兵衛が怒っているのは、お千代の「正体」を知つたからではない。

あくまでも吉兵衛は、お千代が雲霧一味によって、

「拉致された……」

そう、おもひこんでいたのである。

（おのれ。あの泥棒どもめ。千代どのに手を出さぬと約束をしておきながら、ようも、ようも……）

であつた。

（どこへ、千代どのを勾引して行つたものか……まだ、わ

しも、いかとは耳にしてはおらぬが、やんごとなき素姓の千代どのを恐れもなく引きさらって行くとは……もしやすると、千代どののは、京の都の大納言とか中納言とか、身分の高い御公家の落し胤……いや、もしやすると天子さまの……そのような女ごを、せっかく、わがものとし、女房に迎えたというに……ええもう、口惜しい、口惜しい。あの泥棒どもめ、きつと、草の根を分けても探し出してくれよう。そのためには、金に糸目はつけぬ。そしてもし……もしも、千代どのが無事でいてくれたなら、ふたたび、わしが手に引きとり、傷ついた身をいたわってやり、共に末長く暮したいものじゃ)

そのことばかり、おもいつづけていたものだから、松屋吉兵衛は再建成つた住居にも、こころをこめて、お千代の部屋と寝間を設けたのである。

さて……

松屋吉兵衛は当夜、雲霧一味の人相は盗み頭巾に隠れていたもので、たしかめるすべもなかったが、およその年恰好、声の調子、躰つきなどは、可能なかぎり記憶に残していた。そして、あの盗賊一味の盗み装束である。

黒木綿の裾を端折って、黒の股引に足袋。その黒の着物の背中には、

「たしか、灰色の雲の模様が染めぬいてあった……」

ことを、吉兵衛はおぼえていた。

あの夜の騒ぎの翌日。

松屋吉兵衛は町奉行所の一間で、江戸から出張つて来て

いた火付盗賊改方・与力の山田藤兵衛と会い、当夜のことをすべて語りのべた。

「ふうむ……黒の盗み装束に、雲の模様が染めぬいてあったと、申されますか?」

「さよう、さよう。間ちがいはいありません」

山田藤兵衛が、無念さと怒りと後悔を綱いませにしたような、複雑きわまる表情となり、血がにじむばかりに唇を噛みしめ、

「むう……さては、雲霧……」

うめくがごとく、つぶやいたものである。

「くもきり、と申されますのは?」

「雲霧、仁左衛門……」

「えっ……」

松屋吉兵衛も、その名は耳にしている。

「神出鬼没、変幻自在の大盗賊」

として、雲霧仁左衛門は、上方から、関東へかけての金持や富商を恐れさせていた……というよりも、あまりにも實在感のない、むしろ伝説化されていたともいえるだけに、

「ほんとに、いるのかいな?」

「わしのところへは、まさかやっては来まい」

「私はどうも、そのような大泥棒が、この世にいるとはおもえませぬな」

などと、むしろ興味をもつてうわさされていたと、いったほうがよいだろう。それだけに吉兵衛は、

「そりや、まことなので?」

山田藤兵衛へ、問い返さずにはいられなかった。  
藤兵衛は、これに對して、強く、はつきりとしたうなずきをもってこたえた。

それには、それだけの理由がある。

## 二

雲霧一味の因果小僧六之助に、大川(隅田川)で殺害された盜賊改方の密偵・鹿伏(かぶせ)の留次郎は、もと雲霧仁左衛門の手下であつた。

その留次郎から、山田与力も、そして同心・高瀬俵太郎も、「雲霧一味の盜み装束と申しますのは……」

と、くわしく聞かされていたからだ。

留次郎が一味だったときと同じ盜み装束で、彼らは松屋方へ押し入つて來たことになる。

(雲霧め、味なことを……)

このとき山田藤兵衛は、正直にいつて、雲霧仁左衛門という盜賊を、

(洒落つ氣のある奴だわ)

と、おもわずにはいられなかった。

(ただものではない)

のである。

それは、松屋吉兵衛から聞きとつた盜賊たちの、

「一糸乱れぬ……」

盜みばたらきからおして見てもわかるし、また、手下の

盜賊を手指をつかつて、あくまでもしずかに、どこまでもおだやかに、しかも敏速に指揮していたという首領らしき男、つまり雲霧仁左衛門の風格をおもいうかべて見ると、(素町人や百姓の出身ではない。もしやすると、もとは、武家ではなかつたか……)

と、藤兵衛は直感した。

それはさておき、松屋吉兵衛の、雲霧一味へ對する關志は倍加したようだ。

(なあんだ。雲霧仁左衛門とは、あれしきの男か。わしの家には金藏が三つもある。それをよくよく確かめもせず、わざとものものしげな仕掛けをしてあつた、いちばん小さな金藏へ案内をしたら、まんまと乗せられ、五千兩ほどの端金をつかんで、よろこんで引きあげて行つたわい。なんじゃ、あのこそ泥棒め……)

胸の内で、吉兵衛は息まいたものである。

もしも、このことばを、吉兵衛が口にしていたら、山田藤兵衛は苦虫を嚙みつづいたような顔つきになつたろう。

五千兩を端金とは、よくも、いった。

そのころの庶民の生活は、一年を十兩ほどで、らくに暮して行けたのだ。

十年で百兩。百年で千兩、とすれば、庶民一家族の暮しが、五千兩で五百年も、

「まかなえる……」

ことになるではないか。

松屋吉兵衛もばかではない。



いかに吉兵衛といえども、五千両は大金である。

五千両を端金だと、自分の胸にいいきかせたのは、負け惜しみというものであろう。

「もし、山田様、おねがいがございます」

と、松屋吉兵衛が身を乗り出した。

山田藤兵衛と語り合ううちに、江戸の火付盗賊改方が、(かほどまでに、以前から、雲霧仁左衛門一味を捕えようと、身を粉にして、はたらいていたのか……)

ということが、吉兵衛にも、はっきりと、のみこめたからであった。

これなら、尾張家にたのむよりも、盗賊改方へ、たのんだほうがよい。

吉兵衛は、ただもう、雲霧一味の手から、

「千代どのを、取り返したい」

その一心なのだ。

同時に、雲霧一味へも、きびしく仮借のない処罰をあたえてもらいたい。

「まことに、もって、ぶしつけながら……」

と、吉兵衛は、いささかも金持ち風を吹かすような態度ではなく、熱誠にあふれた態度で、

「なにとまして、千代どのを……いえ、私の女房を取り返して下されませ、山田様」

「むろんのこと」

こたえはしたが山田藤兵衛、松屋の申し立てを聞いたとき、早くも、

(ははあ……その、千代という女房は、一味の引き込みをつとめていたに相違ない。また、治平という下男も同類と見てよいし、途中から行方知れずとなった若いほうの下男も怪しい)

と、直感していた。

けれども、いまここで、松屋吉兵衛を、(落胆させて見たところで、はじまらぬ)

そう考え、だまっていたのである。

「よろしゅうござる。もとより、われら、雲霧一味より飲まされた煮え湯を、相手に飲ませ返さずにはおきませぬ」「かたじけない。ありがたい。おたのみ申します。おねがい申します」

吉兵衛は大仰に、藤兵衛へ向って両手を合わせた。

これには、さすがの山田藤兵衛も閉口したものだ。

それから約一カ月。

盗賊改方一行は、名古屋城下へ滞在し、

「いまの用には立たなくとも、これより以後にそなえて……」

雲霧一味の足取りをつかむことに念を入れたのであった。蟹江に近い水田の中から、土地の百姓に発見された男の死体が、密偵・豊治郎であったこともわかった。

目明し・政蔵は、文字どおり、

「歯ぎしりをして……」

くやしがつた。

かくて……。

名古屋城下に於ける江戸の盜賊改方は、またしても苦杯をなめたことになったのだが、收穫はないでもなかった。

たとえば、発見された豊治郎の死体から、その足取りを、おぼろげながらつかめまし、これまでは五里霧中だった雲霧一味に対する手がかりのようなものを、

(いささかは、得ることができたような……)

おもいが、山田藤兵衛にはしている。

### 三

盜賊改方一行が、江戸へ帰ってから間もなく、名古屋の松屋吉兵衛が使いの者を江戸へさしむけ、盜賊改方の長官・安部式部へ、

「雲霧一味の探索のための費用に、ぜひとも用立てて下さい」

こういって、なんと金三百両を寄付したものである。

この小説で、前にもこのべたように、幕府が御先手組のうちから一組か二組をえらび、その組頭を長官に任じ、一種の(特別警察)として寛文五年にもうけた火付盜賊改方であるが、はじめのうちは役料(手当)が出なかった。

したがって、長官が自腹を切り、この役目に必要な経費をまかなってきたのである。

盜賊改方の長官には、組下に与力が五人から十人、同心が三十人ほどついているけれども、それだけでは悪党どもの探索ができるものではない。

目明しや密偵を何人もつかい、金を惜しまずに彼らをはたらかせる。それでなくては、とても効果があがるものではないのだ。

ゆえに、幕府も、盜賊改方の長官に任じる旗本をえらぶについて、

「なるべくは、裕福の家柄のものを……」

と、いうことになる。

えらばれたものは、

「たまったものではない……」

わけであった。

だから、しだいに、自腹を切ってまで骨身惜しまず、この御役目をつとめ、

「悪党、盜賊どもを退治してくれよう」

意気ごむことが、ばかばかしくなってくる。

したがって、御役目も、投げやりになつてしまふ。

徳川將軍の威風のもとに、天下泰平の世の中がうちづくにつれて、旗本たちの氣風が、そうなってくるのも当然なのであった。

それでは、せっかくに設置した特別警察の意味がない。

幕府も、ようやく、そこへ氣づき、四十人扶持の役料を出すことにした。それが、数年前の享保四年のことで、むろん、出ないより出たほうがよいにきまっているが、それほどの役料では、

「とうてい、足りるものではない」

現に、山田藤兵衛以下の組下を名古屋へ派遣させたときの費用も、すべて、長官・安部式部のふところから出ているのである。

こういう事情だけに、安部式部は、ひそかに、山田藤兵衛をよんで、

「松屋吉兵衛から三百両もの金をとどけてまいったが、いかが、取りはからおうか？」

と、いった。

言下に藤兵衛は、

「それは、ありがたく、いただいておりますは、いかがでございますよう」

と、こたえる。

これまでにも、こうしたことは、たびたびあった。

たとえば、江戸市中の商家に押しこみ、大金を強奪して逃走した盗賊どもを捕え、その金を取りもどし、商家へ返してやるのができた折など、盗賊改方の内情を知っている被害者が、

「おかげをもちまして……」

礼をのべると共に、金を寄付してくれることもあった。御役目にもいろいろあって、

「あの御役目につくことができれば、三年で蔵が建つ」

などという結構な役職もあるかわりに、火付盗賊改方などは、まことに、

「貧乏くじを、ひいたようなもの……」

であって、ことに安部式部は一身をかえり見ず、悪党退

治にはたらいっていることが、その実績によって、江戸市中の人びとの耳へもとどいている。

だから、人によつては、こうして寄付をとどけ、

「世の中のため、おはたらき下さる安部さまのお役に立てば……」

と、申し出て来るのであった。

「よし」

安部式部は、松屋の寄付を受け取ることに決め、

「これは、せっかくに、松屋吉兵衛が雲霧一味の逮捕をねがつてとどけてくれた金であるから……」

と、この三百両を、

「雲霧仁左衛門一味の逮捕のための特別費用」

に、当てることにきめたのであった。

その管理は、

「藤兵衛。おぬしにまかせろ」

と、いうのである。

山田藤兵衛は感激した。

つまり藤兵衛は、雲霧一味の、

「特別捜査班の主任」

となったわけだ。

名古屋からもどつて、あのときの失敗をわび、場合によつては、御役御免をも覚悟していた山田藤兵衛へ、安部式部はこういった。

「よいわ。これまでは雲をつかむようなものであった雲霧仁左衛門が、どのような盗みばたらきをするかを、おぬし

は、その目でたしかめてまいったのじゃ」

その体験は、かならず今後の探索に、

「ものをいうであらう」

と、藤兵衛はかえって、長官からなくさめられ、はげまされたのである。

こうなると山田藤兵衛の、雲霧一味へ対する闘志と執念は、さらに烈しく強いものになってきた。

藤兵衛は、

「おれが生涯をかけても、かならず、雲霧仁左衛門へ御縄をかけてくれよう」

と、わが胸に誓った。

#### 四

あのときの口惜しさというものは、同じ盗賊改方でも名古屋城下へ出張って、あの夜を体験した者でなければ、身にしみてわからなかったらう。

雲霧仁左衛門ばかりか、

「どうやら、暁星右衛門の一味も、同じ名古屋に蠢動していた……」

のである。

雲霧一味にも煮え湯をのまされつづけてきた火付盗賊改方だが、暁星右衛門についてもいまだに、はっきりとした手がかりがつかめていない。

ただ、星右衛門は、上方から中国すじで「盗みばたらき」

をすることが多く、むしろ、江戸へは骨やすめにやって来るかたちなのだ。

それだけに、星右衛門の所在をつきとめることがむずかしく、いっぽうでは、暁一味が江戸において跳梁をほしのままにしているわけではないので、当然、盗賊改方の暁一味へかける執念の度合いも軽く、うすいことは事実であった。

それにしても、いまの盗賊の世界で、二つの大きな柱だとされている雲霧と暁一味が、同じ名古屋城下にいたのだ。「それを、いま、一步のところまで……」

取り逃がしてしまった。

盗賊改方が打った網の中へ、二つの大きな獲物が、首を突き込みかけていたのだ。

「それを、みすみす……」

であった。

「これが、江戸だったら……」

と、山田藤兵衛も高瀬たち同心も、何度、切齒扼腕したか知れたものではなかった。

あれだけの大きな網をあやつるには、あまりにも人の手が足りなかった。

それにつけても、

「あのときの尾州藩・町奉行所の仕様は、いったい何だ!!」怒りが、こみあげてくるのを、押えようもない。

江戸幕府と尾張家との、長年にわたる確執については、盗賊改方も、わきまえていないわけではない。

だが、  
「それとこれとは、別のことではないか……」  
なのである。

尾州藩の町奉行所でも、あの事件があつてのち、いちおうは、

「当夜、鍵屋方から火が出なければ、すぐにも捕方をさし向け、たとえ、いったんは盗賊どもが逃げたとしても、かならずや、引っ捕えることができたにちがいない」

などと、いいのがれをしていたようだが、しかし、尾州藩の御用達として、財政的にも重要な役割を果たしている松屋吉兵衛方が、当の盗賊一味に襲われたとあつては、

「捨てておけぬこと……」  
に、なつてしまつた。

町奉行以下、数名が更迭<sup>こうたつ</sup>される、というさわざになり、それから町奉行所も、盗賊改方の捜査にちからを惜しまず、はたらいてくれるようになったのだが、

「時、すでにおそい」  
ではないか。

これが、一地方の町や村や小都市ならばともかく、いやしくも徳川御三家の一である尾張家の城下で起つたことなのだ。

「それにしても、その、鍵屋又兵衛という扇子屋の火事でござりますが……」

と、山田藤兵衛が、盗賊改方の長官・安部式部へ、  
「いささか、腑に落ちませぬ」

「ふうむ。焼けあとから、又兵衛夫婦や奉公人の死体が出てまいったそうな……」

「さようでございます。あのあたりで、みすみす焼け死ぬようには考えられませぬ。どうも、ただの火事とおもわれませなんだ」

「それと、雲霧一味の盗みばたらきと、関わり合いがあると申すのか？」

「さて、そこまでは……」

これは、尾州藩の町奉行所にしても、同じおもいであつたろう。

鈴木又七郎ら〔御側足輕組〕の、当夜の活動については、町奉行所も、まったく、これを知らぬのであつた。

こうして、雲霧仁左衛門には、またしても煮え湯をのまれた盗賊改方であつたが、江戸表においては、安部式部の指揮の下に、与力・同心たちが寧日<sup>なまひ</sup>なくはたらいており、兇惡な盗賊どもが何人も捕えられ、処罰された。

幕府も、

「安部式部において、火付盗賊改方は無し」

と、その功をみとめ、特別に、將軍家から、金百両が下賜されたというのだから、よほどに、安部式部ひきいる盗賊改方は活躍をしたにちがいない。

名古屋城下における事件は、幕府の耳へも入つていたようであるが、その失敗が帳消しになつてしまつたようだ。

## 五

享保八年の夏。名古屋で松屋吉兵衛方の店舗が再建されたころ、江戸へ帰って養生をつづけていた高瀬俵太郎の躰も、ようやく回復に向いつつあった。

四谷・坂町にある、安部式部組の〔御先手組屋敷〕内の長屋で、高瀬は、老母・お喜佐の看病をうけ、鬱陶しい梅雨の季節も、どうやら乗り切った。

その梅雨が明けたばかりの或る日の午後、

「ごめん」  
関口雄介が、突如として、高瀬の長屋へあらわれたものである。

「これは、先生……」

「おお。元氣になったな」

はじめのうち、高瀬俵太郎は、関口雄介が、江戸へ帰っていたものとおもっていた。

ところが、見舞いに来てくれた関口道場の門人や、安部式部の甥にあたる植村栄三郎などから、

「先生は、一度も、江戸へお帰りにならぬ。われわれで、道場をまもっている」

と、きいていた。

「名古屋で、最後に、鈴木又七郎様御屋敷をたずねましたとき、関口先生は江戸へお帰りになられた、と、うかがいました……」

という、高瀬俵太郎に、関口雄介は破顔して、

「そうか……いや、あれから名古屋へ出て、ふらりと、上方へ行ってしまったのだよ」

「上方へ……」

「向うには……ことに大坂には、剣術の友だちがたくさんいてな。それをたずねまわり、遊び暮しているうちに年が明け、春になってから名古屋へもどり、従兄上の屋敷へ行って、おぬしのことを逐一きいた。何やら、大変なさわざだったそうだな」

こだわりもなく、関口雄介はいうのだが、高瀬は、  
（どうも、以前の関口先生とは、ちがう……）  
ような気がした。

これは、やはり盗賊改方・同心としての、高瀬俵太郎の、  
「勘ばたらき」  
と、いうものであつたろう。

だが、それが何であるかは、高瀬にもわからなかった。

ただ、以前は剣術ひとすじに打ちこみ、他の世界のこと  
は放り捨てて、磊落に暮していた師・関口雄介の眼が、何  
やら底知れぬ深い色をたたえているのに気づいたまでであ  
る。

「おれが、おぬしへ知らせたことは、ものにならなかった  
ようだな」

「申しわけありませんね」

「なんの……こうして、元氣になったおぬしの顔を見れば、  
それでもう、おれは満足だ」

あの夜。

町奉行所の同心と、竜乗寺の寺男が、墓地の土中に埋めこまれて死んでいたことは、雄介もきいている。けれども、生きていて、目明し・政蔵に助け出された高瀬俵太郎のことは、名古屋城下に知れわたっていなかった。

「おぬしが、名古屋で病氣にかかり、まだ、寝込んでいるときき、おどろいてやって来たのだ」

と、雄介はいった。

「かたじけのうございます。で、先生は、いつ、江戸へおもどりに？」

「三日前だ」

「これよりは……？」

「おう。当分は江戸をうごかぬつもりよ。また、以前のよう  
に仲よく、みんなと稽古をしようではないか。な、高瀬」  
「はい」

間もなく、関口雄介は帰って行った。

雄介は、あれからも、ずっと名古屋の鈴木又七郎邸へ滞留していたのである。

当夜の収獲について、鈴木又七郎は、こういつている。

「雄介。おもいもかけぬことがわかった。やはり、決行してよかった」

それが何であるかは、雄介も知らない。

おそらく、江戸幕府の隠密組織につながる密書か、または秘密書類のようなものが、鍵屋又兵衛方で発見されたのであろう。

（だが、あの、同じ夜に、高瀬たちが追いもとめていた雲霧とかいう盗賊どもが、松屋吉兵衛方へ押し込もうとは……おれも、わからなかった）

雄介は、そのことをおもうと、苦笑がうかんでくる。

（高瀬の役に立つてやろうとして……おれたちが、それを邪魔してしまったことになる）  
のであった。

鈴木又七郎や関口雄介がしている隠密の行動は、火付盗賊改方と盗賊どもの争いとは、まったく異なるものである。無関係のものといつてよい。

（だが、本質は、同じようなものではないのか……）

それをおもうとき、おもわず苦笑を禁じ得ない雄介なのだ。

一は、警吏対盗賊。

一は、江戸幕府の隠密と尾州藩隠密。

目的はちがうが、探り合い、闘い合っている人間の姿というものは同じなのである。

地下穴などを掘ってまで、鍵屋又兵衛方へ潜入したときの自分たちの姿をおもいうかべると、

（鍵屋から見れば、あのときのおれたちは……）

押し込み強盗の……それも兇悪きわまる性質のものといつてよいだろう。

（ふ、ふふ……それにくらべると、剣術に打ちこみ、わが心と身をみがきぬくことのみへ無心に立ち向うということは、まことによいものだ。それがわかつていながら、おれ

も……おれも從兄上と共に尾張家のため、あのようなことをしてまでも、はたらく氣になる。これはどういうことかな？……人間の業というものか。いや、わからぬ、わからぬ)

江戸へもどる関口雄介に、鈴木又七郎は、こういった。

「しばらくは江戸にいてくれ。そのうちに、おれが江戸へ行くことになるやも知れぬ。いずれにせよ、これから五年先、十年先がむずかしくなる。そのつもりでいてくれ」

## 六

夏がすぎ、秋風がたちはじめたころ、高瀬倭太郎は、ほとんど元どおりになつた髯を、土手四番町の役宅へあらわした。

上司、同僚たちが、

「癒<sup>なほ</sup>つてよかつた、よかつた」

「名古屋では、残念だったな、高瀬」

「あまり、むりをせぬように……」

などと、くちぐちになぐさめてくれた。

目明し・政藏の口が堅い上に、与力・山田藤兵衛の配慮により、高瀬が墓地の土中に埋めこまれていたことは、他へもれていないようである。

高瀬は、それが実にうれしく、また一方では、

(冷汗三斗のおもいがした……)

ものである。

ことに、与力の控部屋へ行き、山田藤兵衛にあいさつをしたとき、居ても立つてもたまらぬほどの恥ずかしさを感じた。

あのことを、高瀬は老母にも語っていない。

だから、老母は、

「このように長患いをするなどとは、おもつても見なかつた。やはり旅立ちの時の無理が障つたものか……」

と、いまもいう。

「先ず、本復してめでたい」

山田藤兵衛が、いたわるように、暖かい微笑を送つてよこした。

「おそれ入ります」

「なんの。おれは、おぬしのはたらきを、高く買っている。御頭にも、あますところなく申しあげておいたぞ」

「あますところ、なく……?」

「は、はは。あのことはもらさぬ、もらさぬ」

「ああ、まことにもつて、不様な姿を……」

「これ高瀬。それは、おもて向きのことだ。実は、あのような目に合うたおかげで、おぬしは、またとない手がかりをつかんだのだぞ」

「いえ、しかし……」

「高瀬。おぬしは、墓地に埋めこまれていたとき、雲霧一味の盜賊の声を耳にしたというではないか。それ……小平と伊平とか、呼び合っていた二人の盜賊の声を……」

「はい」



「その二人の声を、いまでも、おぼえていような？」

「忘れるものではございません」

と、高瀬倭太郎は、血がにじむばかりに唇を噛みしめた。

「それでよし。そのことが、これから先、いつ、どのような役に立つか知れぬぞ」

折しも、長官・安部式部は役宅にいなかったため、高瀬は山田藤兵衛とひびをまじえ、一刻(二時間)あまりも、控部屋で語り合った。

そのとき……。

高瀬が、こういった。

「山田様。私、長い間、病の床にふせっておりながら、いろいろと、考えてみたのですが……去年の、名古屋でのことをふりかえて見ますと、どうも、雲霧仁左衛門にとっては、尾張から伊勢へかけてがなじみの深い国、土地柄であるようにおもえてなりません」

すると、藤兵衛が身を乗り出し、

「高瀬。おぬしも、そうおもうか……」

「はい。では、山田様も？」

「うむ。おれも、そのことを、おぬしが出て来たら、先ず第一に、いおうとおもっていた」

「さようでございましたか……」

「それで？」

「まことに、わがまま勝手なる御願いなのですが……」

「ふむ、ふむ」

「実は……」

「いうて見よ」

「私を、いま一度、尾張から伊勢へ、やって下さいませぬか。こころゆくまで、雲霧一味の足どりを探って見たいのです」

「一人ですか？」

「はい」

「なるほど……」

藤兵衛は腕を組み、両眼を閉じて沈思した。

「なりませぬか？」

「うむ……」

「おそれながら、路用などは、私にも、いささか貯えもございすれば……なんとか、やれると存じます」

「そのことよりも、高瀬。おぬし一人よりも、いま一人、つれて行きたい男がいるのではないか、どうだ？」

「は……」

「目明し・政蔵。どうじゃ？」

「おそれ入りました」

「よし」

決然と、うなずいた山田藤兵衛が、

「おれから御頭へ、申しあげて見よう」

「ま、まことでございますか」

「まかせておけ」

「かたじけのうございます」